

## 日本仏教における聖水 真言宗のケーススタディ

### 序文

「聖水」は、世界のほとんどの宗教に見られる現象です。温泉や湖、海に宿る神は水に帰し、存在そのものを水に吹き込み、自然を超えた力を与えます。「聖水」は儀式や崇拜の対象になり、特別な力が宿っている為に普通の水とは一線を画します。宗教学における「聖水」の研究はかなり長い間行われていますが、この現象における研究は長い間、ユダヤ教、イスラム教、キリスト教、そしてヒンズー教でなされてきました。しかし「入浴」についての研究は、一般的には近年注目を浴びるようになりました。例を挙げるとイスラム教のハマーム、ユダヤ教の儀式にあるシユヴィツとミクヴァ、ネイティブアメリカンのスウェットロッジと呼ばれるスチームバスがあります。またセブンスデー・アドベンティストや他のアメリカ宗教グループなどでも、入浴は行われています。

しかし実は仏教における「聖水」の役割や、宗教的観点からの入浴についての研究はほとんどなされていないのが実情です。この論文では特に真言宗に焦点を当てながら、入浴と日本仏教の伝統が交わる点に全体像を置きたいと思えます。世界の三分の二の温泉が日本に存在し、日本人のお風呂好きも知られています。仏教の考えと習慣を非常に高度なお風呂文化に反映・発展させた日本では、その歴史の中、膨大な資料がしたためられました。そして東寺、醍醐寺などの具体的な寺湯と日本での風呂文化を創造した第一人者である、弘法大師空海の温泉発見伝説における役割を例に挙げ、清めと癒しという二つの柱を軸に説明していきたいと思えます。

### 入浴と仏教…浄化の文化

日本に仏教が入って来た時、入浴を通じて清めの文化が紹介されました。「仏説

### ウィリアムズ・ダンカン

温室洗浴衆僧教（別名「温室教」 大正大藏教七〇二）などの仏典は、身体を清めることにより心も清まるという教えに基づき、入浴を促しました。この観念は、身体の汚れを洗うことによって同時に精神的汚れ、つまりカルマをも洗い流すことになるという汎インドのものと関係しています。今日のヒンズー教で最も知られているこの習慣が、ガンジス川で見られる沐浴です。特に一三年に一度ガンジス川で行われるマハークンブメーラ (Maha Kumbh Mela) という大沐浴は、前世から積み上げられてきたカルマを洗い流す力があるとされています。

日本では禊または潔斎と呼ばれる、清めの仏教以前の観念が存在します。神の前に立つ前は、さまざまな種類の汚れを落とすものとし、宗教的想像と儀式の大切な役割を担っています。この汚れ落としはカルマを落とすものではないのですが、仏教以前と仏教の概念にある「清め」は、身体をきれいにするのは前もつて必要とされる行為、もしくは精神をきれいにするという共通する観念なのです。

### 入浴と仏教…清めの文化

仏教が日本にもたらしたもののといえば、日本人にとっての新しい興味としての洗浴です。その目的の為に、宗教的な風呂の施設として温室が建設されました。エドワード・シェファー氏 (Edward Schaeffer) が指摘した中国のケースのように、清めという仏教観念学は、元々僧や尼が修行中に使用していた寺湯の建造物がきっかけで、広く伝わることになったのです。<sup>1)</sup>

それは特に東大寺、興福寺、唐招提寺のような大規模な寺院にとっては、建立する際に絶対必要な建物となっていたのでした。<sup>2)</sup> 奈良時代初期、湯屋、大湯屋、風呂、寺湯などと多くの名前と呼ばれていた寺院の湯殿施設は、修行僧や尼にのみ限定された場所でした（例えば儀式の前や神の前に立つ際、事前に自分を清める）。

奈良時代初期、入浴とは、修行の一環として考えられていました。つまり、修行不足の僧侶は寺湯には入れなかったのです。<sup>(3)</sup> さらには、川、湖、温泉などに浸ることと人間が建てた物に入浴することを対比すると、遡った初期の頃蒸し風呂にはいるというのは、仏教聖職者と貴族階級のみの特権でした。蒸し風呂が湯船を建設するには費用がかかり、さらにその維持費も高くつきました。特にお湯を作る薪は、市井の人にとつて極端に値が張るものだったのです。

忙しい毎日の中でも、第二次世界大戦後の日本人は大のお風呂好きということは知られていますが、日本の長いお風呂の歴史の中ほとんどを通じ、実は入浴とは地域のものでしたのです。現在私達が認識する公衆浴場もしくは銭湯とは、室町時代の間に発展し、徳川時代に人気が出ました。しかしその元祖といふべき存在は奈良時代の寺湯にまで遡ります。奈良時代、そして平安時代に一層その頻度は高くなつたのですが、仏寺は元々聖職者に限定していたお風呂を「慈善事業」として庶民に開放したのです。この慈善事業は施浴と呼ばれる習慣に基づき、僧侶や貴族が庶民に寺湯を開放するため資金を出し、それによつてこの世でのより良い人生、ひいては来世の救いも求めようとしたのでした。

これらの風呂は施行湯や施行風呂、功德湯、立願風呂などと呼ばれ、無料でどの階級の人達にも開放された為人気が出ました。その結果、仏教の清めという文化を普及させる重要な仕組みとなりました。施浴の観念は、他人の為、とりわけ乞食や社会的に不利な立場に立たされている人達をきれいにする場所を作ることに基づき、それをきれいにするにより自分自身のカルマを落とすという風に機能していました。最も知られている例では、聖武天皇の妻で、孝謙天皇の母であった、国分尼寺法華寺の光明皇后が挙げられます。<sup>(4)</sup> 伝説によれば、彼女はなんと千人もの人々を対象に、身体を洗う作業を行ったのです。貴族ながらも、実際にお風呂に入りに来た乞食や庶民の背中をこすることで、彼女はこの慈善行為に身を捧げたのです。千人目はハンセン病患者でしたが、光明皇后はその人の背中を嫌がらずに洗っただけではなく、皮膚から膿を吸い出したとさえ言い伝えられています。この有名な場面は「東大寺縁起絵巻」に描かれています。それは、ハンセン病の男性が身体を洗ってもらっているうちに、阿闍の姿を光明皇后に現すというものです。勿論この伝説には、他人の為に何かをする情け深い心を持つという教訓的側面もありますが、

施浴という観念、そして仏教の物語の多くに関係するメッセージが含まれていることは、注目すべき点だと言えるでしょう。しかし同等に注目すべきは、寺湯では社会的階級が曖昧になり、ハンセン病患者と貴族が、僧侶と庶民が、そして神でさえも自由に入れる場所であった可能性を示唆している点です。

京都にある東寺真言宗の総本山、東寺（正式名…教王護国寺）は、平均で一ヶ月に六回施浴を行い、最も知られている施浴の慣例があった場所です。弘法大師空海が別当として任命された時、彼の命により建てられた東寺の風呂は、一九五五年まで「お大師さんの湯」として続けられました。一般の市民が無料で入れる施浴の為に出入する人は、一回につき平均四〇〇文を支払いました。<sup>(5)</sup> 寺湯はお風呂に浸かりに来る人にとつても出資する人にとつても全て、清めが出来る「ご利益のあるお風呂」という意味合いを持ちました。また東寺で最も頻繁だったのは、スポンサーなら、自分の先祖の命日に金を払ったり、施浴を受ける側は命日に合わせ風呂に入りに来ることでした。そうすればご利益があると思われていたのです。

それと対照に真言宗の醍醐寺の風呂は、庶民対象ではなく、後援者である貴族のみに向けて開かれていました。寺の2ヶ所、上醍醐と下醍醐には一一八三年、重源によつて資金集めが行われた後に出来た、合計五つの鉄で出来た湯屋がありました。<sup>(6)</sup> 施浴という観念が、湯屋は社会的に平等であるという概念を推進したものの、醍醐寺の湯屋の限定された性質と、僧侶の位や社会的に高い地位にいる人達の厳しい規則により、ここで新たな中世の入浴文化の性質が生まれました。寺院の入浴におけるこの新たな側面は、湯屋とは、僧侶と社会的階級制を抑制するよりも、その階級制を確立もしくは強化することとなりました。ここに東寺と醍醐寺が特に日本人の風呂文化にもたらしたであろう二つの側面があります。まず一つは「裸の付き合い」という言葉が示すように、入浴は人類として人間をより親密にさせる場であること。もう一つは、家族や社会、性別、仕事関係の階級制がより強化される場であるということでした。

公共の湯屋は、施浴の観念に基づき無料の風呂として始まりました。しかし戦国時代には、入浴料を取る傾向が出てきました。<sup>(7)</sup> 一度の入浴につき料金を支払うこともありました。家族が一日風呂を借り切る予約制度や、湯田地と呼ばれる一括払いもありました。この場合、入浴の代わりに土地を借り、その土地で出来た穀物

を寺院に納めることになりました。ささやかな金額の代わりに誰でも入れる寺湯を開くシステムの登場や、地元の役所の運営による銭湯の出現は、施浴の観念を弱めました。首藤善樹氏が議論しているように、その人気の高まりゆえ、寺の経済は寺湯の入浴料を取ることに依存するようになったのです。つまり、言い換えれば初期の概念にあった僧侶限定だった風呂が、誰でも入れる存在になったのです。寺院では、経済的に入浴料を取ることが必要不可欠になりました。薪を集めたり湯を作る湯那や湯維那、監視役の湯奉行を含む湯方の部署のような、訪問者の為に湯を準備する担当に任命された修道院の位にあるさまざまな者の存在は、寺湯の商業化を証明しています。逆説的になりますが、清めの文化が仏寺から一般に広がる一方、日本の社会の根底で、入浴の宗教的修行の意味合いが弱くなってきました。

清めの文化はまた、幾人かの僧達によつて、癒しという新たな入浴の重要な要素と関連付くようになりました。真言宗や西大寺系列の叡尊や忍性などの僧侶は、厳しい戒律と社会での奉仕活動で知られています。奈良の新浄土寺などの幾つかの律宗寺院は銭湯として客に入浴料を取りました。しかし基本的に多くの律宗寺院では、お金が無く病氣の人に対しては無料で施浴を行っていました。付け加えるならば、橋を建設したり乞食や非人に食べ物を与える、仏教道の慈善活動に重きを置く医療サービスを施していたのです。北山十八間戸や鎌倉の極楽寺のように、僧侶が作った寺院の敷地内の病院や診療所の入浴施設は、清潔で治療効力がありました。例えば極楽寺では忍性が、現在の医療センターの一貫として、特にハンセン病患者の為に、病院と薬草の入浴施設を建てました。<sup>9)</sup> このセンターは最高一五〇人の患者を収容出来ましたが、治療を求めてやってくる患者の数は、いつもそれを上回っていました。その為、僧侶でありながら医師である彼らは、寺の本堂で治療を行っていました。

前述の光明皇后の伝説では、皇后が寺湯でハンセン病患者の手当てをされました。一方この時代の僧侶が治療を行ったのは最も治る見込みが無い難病を抱える患者で、それは前世の悪い行いから来る業の深い病氣、つまり業病だと思われていました。しかし僧侶は社会的に無視されていたグループの中で最も根底に位置した、その頃非人と呼ばれていた人々を、喜んで救おうとしていました。なぜなら叡尊や忍性に見れば、ハンセン病患者は文殊菩薩の化身だったからです。そして彼らの

手当てをするということは、菩薩に身を捧げると同意語だったのです。<sup>10)</sup> 実は仏教と癒しは切っても切れない関係にあります。温泉文化に目を向ければ、その事実は日本の全ての温泉二千ヶ所以上で見られるのです。

### 温泉の発見と仏教・癒しの文化

ここまでは、施浴の観念を通じた日本の風呂文化の広がりと、現実的問題として大規模な寺院では風呂を建設する為に、時を購入し設備を整えられる、経済的に余裕のある世帯をパトロンに持つ必要性があったと述べてきました。それゆえ、身体を洗い、ミネラルによつて身体を癒せる温泉が地球から無料で湧き出たことは、仏からの贈り物だと人々が思ったとしても驚くことではないでしょう。実に日本におけるほとんどの近世以前の温泉発見伝というものが、超自然的な動物や鳥、温泉神、仏教の神に焦点が置かれています(薬師如来は癒しの仏の代表例ですが、その他にも地藏や観音、不動なども存在します)。薬師堂がある、もしくは地元の温泉に奉納してある神社は、実質的に日本の全ての温泉で存在していると言えます。<sup>11)</sup> 仏教において、入浴とは第一の柱が清めであるとするならば、第二の柱は癒しなのです。それが日本では、湯治という癒しの習慣に繋がったのでした。人々が治療効力を期待し温泉につかるという証拠は、古代や中世でも見られることです。しかし温泉の為、大規模な旅行を長期間(七日間の湯治を三回行うのが、昔から薦められていたことです)行う湯治場は、徳川時代に発展しました。ほとんどの湯治場は「聖」と結び付き、前近代日本人は癒しを与えられたのでした。仏教の仏や神道の神だけでなく、僧侶も奇跡的な力を携えていると考えられていたのです。

真言宗で最も良く知られている僧侶は、弘法大師空海でしょう。歴史的に知られている、弘法大師が実際に全ての温泉を発見したという話は恐らく信憑性が無いと思われるものの、「温泉発見伝」による、弘法大師が発見したと主張する温泉の数が最多だということは、議論の余地がないでしょう。<sup>12)</sup>

ミッシェル・スワミエ氏(Michel Soyrie)が中国の例を挙げ述べているように、仏教の僧侶と道教の仙人は往々にして、温泉源を言い当てる超自然的な力がありました。<sup>13)</sup> 弘法大師のように仏教の僧侶にその傾向があったのは、恐らく前近世の時

代に多くを旅する立場にあり、結果、山や水路について詳しくかつたからに他ならぬであろう。それはつまり、彼らが温泉や山に生えている葉草、その他の治療に効く自然に力に精通していたという事です。弘法大師が発見されたと言いつたに於いては、その温泉は、実は彼が発見したのではなくとも、真言宗や山伏達が土地の地理に詳しくなつたと考へるのは、恐らく可能なことであろう。そして彼らが地面のどこから温泉が湧き出ているかを発見した時、発見者を自分が信じる宗派の創始者の名にしたと考へられます。温泉縁起、または温泉発見伝の多くが室町時代後期と徳川時代前期に作られたのと、社寺縁起が作られたのは大体同じ頃です。どちらの縁起にも、名の知られた僧侶が発見者や創始者となつたというパターンが見られます。

言い換へれば、これらの縁起が歴史的に真実かどうかはさておき、重要なものは温泉や井戸、飲料用の水源は弘法大師によつて発見されたとされていることです。この発見伝により、いかにして水源を発見して使うかを教えられた、東寺の苦しんでいた人々や水不足の地域全体が感動したのです。そして彼らはその思いを、弘法大師をモチーフとして伝へたのです。弘法大師橋の建設や現在で言うところのダム建設などに関わる技術に精通してました。また腹痛の薬で、高野聖によつて全国に広められた陀羅尼助などの漢方を考案するなど、医療にも詳しくつたのです。つまり彼は、癒し効果のある温泉の発見者としては、完璧な人物像であつたという事です。

治癒効力のある温泉の発見伝が、宗派を特定しているのは特別驚くべきことではありません。弘法大師の例で言えば、最も有名なのは伊豆半島にある修善寺温泉でしょう。伝説によれば、町の真ん中にある独鈷の湯は、井戸を掘る時に弘法大師が自分の独鈷（金剛杵）を使用した事から、その名が付けられました。現在も川べりに混浴露天風呂として入れる独鈷の湯。弘法大師の伝説の多くは、錫杖もしくは秘密の道具としての独鈷を中心に描かれています。独鈷には水がない場所に水を、もしくはただの水を治癒効力のある水に変える奇跡的な力が込められているのです。修善寺の温泉の場合、重病である父親を治す為に、冷たい川の水で父の身体を洗う子供が川岸にいました。感動し、助けたいと思つた弘法大師は、錫杖を使い川の水を温かな治癒効力のある水に変えました。そしてその水でどうやって看護をすれば良いか教えてみたところ、父親はすぐに治りました。「独鈷の湯」は最も古くからある温泉で、修善寺温泉の大元の源泉として知られていて、「秘湯」の良い例にな

るでしょう。

真言宗は儀式、道具、個人からなる奇跡的な癒しのパワーを持ち、日本の風呂文化にも貢献をしました。修善寺「独鈷の湯」でも城崎温泉の「まんだらの湯」でも、密教用語と力が存在しています。伝説によると、弘法大師がさまざまな寺を建立したり温泉を発見したのですが、彼の行く先々では多くの地域で密教の力が示され、それは今日でも垣間見ることが出来るのです。真言宗が必ずしも日本全体における仏教文化の「密教化」によつて大きく発展したわけではなくとも、他の宗派の発展において与えた影響は無視できません。例えば徳川時代中期までは最も多くの寺院を建立した曹洞宗も、密教化されました。曹洞宗は真言宗の寺院を、特に関東と東北地域で改宗しました。また、密教の陀羅尼と「切紙」が、曹洞宗の儀式に反映されました。

弘法大師によつて真言宗の寺として建てられた修善寺について付け加えると、その後中世終わりごろ、曹洞宗へと変わりました。その他密教化された曹洞宗との関係がある温泉と言へば、福島県にある慈眼寺が挙げられます。弘法大師は慈眼寺を開山しただけでなく、熱塩温泉も発見したと言われています。<sup>14</sup>しかし熱塩温泉も慈眼寺も、近世の「中興解散」という、源翁能昭による寺の再興運動が起こるまでは栄えませんでした。源翁は能や歌舞伎の演目で、近づく人と人や動物、取などが殺されてしまう那須の殺生石で知られる僧侶です。<sup>15</sup>「殺生石」という能や歌舞伎の中で源翁は僧侶として、その石から出る邪悪な力を封じ込めます。詳しいことは明らかにされていないのですが、弟子による源翁の伝説には、3つのことが描かれています。それは、石に向かって法話をし、石の中の邪悪な存在に対し授戒会を行います。救いの証明として特別な禪の系譜である血脈を授けました。このような、地元住民と地元の神に迷惑を及ぼしていた存在が、曹洞宗の仲間入りをするという一定のパターンが存在します。地元の神に曹洞宗の教えを授け、曹洞宗の仲間入りをさせること、これは神人化度と呼ばれます。<sup>16</sup>その代わりにこのような神達は、鎮守の神として曹洞宗の僧侶や寺院を守護し、水源や温泉を差し出したりしたわけです。つまり仏教ではない地元の神は、仏教の仲間入りをさせてもらった感謝の気持ちを表す為、何か形あるものか利用しやすいものを僧侶に返しました。地元の神から精神的・物質的な守護を受けるだけでなく、感銘を受けた地元住民の後援も受ける曹

洞宗の僧侶。このプロセスは、曹洞宗の力を例証しています。神人化度が禅にとって、地域で拡大する為の典型的な戦略である一方で、元々は嗣法の証明の方法だった血脈は、救済をもたらす力のあるお札であると多くの学者が述べています。お札としての効力のある血脈とは、密教化された曹洞宗にとって大切な要素だったのです。

源翁能昭は、特に現在の福島県、栃木県、その周辺の水と温泉の神である地元の神を仏教に改宗させることで有名になりました。<sup>(17)</sup> 熱塩温泉を例に挙げると、源翁が改宗させたことで、慈眼寺は地元の神から源泉を与えられました。<sup>(18)</sup> これらの温泉は徳川時代中期、主要な湯治場の最終地として、また子宝の湯として、年間平均七千人が訪れました。

曹洞宗の歴史学者である広瀬良弘氏は、源翁の豊富な地理と水路に関する知識は、源翁が那須の殺生石から発せられる毒ガスをいかに感知し回避したか、また、水源や温泉を掘り当てるのをいかに地理的に認識していたかを述べています。しかし現代におけるこのような説明は、弘法大師によって創始され、源翁によって温泉源を与えられた熱塩温泉街の住民には、ほとんど何の影響も与えないことでしょう。今日でさえも、寺院の地下にある水源でもって、全ての旅館から水源料を得ているのです。

仏教の寺院が管理しているこの種の温泉は、有馬温泉、渋温泉、城崎温泉、龍神温泉、日光山温泉など、日本に数ある温泉寺の現象として見られます。<sup>(19)</sup> 長野にある渋温泉は、伝説によると弘法大師が創始しましたが、曹洞宗の寺が温泉源を管理しています。武田信玄がスポンサーだった渋の温泉寺は、現世と来世に渡ってご利益があった寺として有名です。上に挙げた他の温泉のように、現世利益のような治療効力のある水としても機能します。特に刀で切り傷を負ったり怪我をした信玄の兵達が、現在は「信玄の釜風呂」として知られる寺院の薬草風呂に入りに来ました。その一方で、傷が深刻で亡くなった兵達を来世供養する為、この寺は遺体を埋葬し菩提の供養を行う場所としても、地元で知られるようになったのです。

真言宗や他の宗派が日本の風呂という慣習に与えた影響を、正確に細かく説明することは大変難しいことです。影響はあちらこちらに広がっているからです。しかし長い歴史の中で、独鈷、まんだら、陀羅尼などの真言宗の用語と儀礼、それから

弘法大師などの真言宗の僧侶が、日本の風呂文化の中で清めと癒しという概念を普及させたことは間違いありません。

### 引用文献

- 阿部泰郎 一九九八年『湯屋の皇后〜中世の性と聖なるもの〜』名古屋、名古屋大学出版会
- 秋月水虎 一九九八年『極楽寺忍性』東京、叢文社
- 熱塩加納村史編纂委員会編一九八二年『熱塩加納村史』第一巻 熱塩、熱塩加納村
- 長谷川俊峰 一九九七年『源翁禅師と常在院』表郷村、常在院
- 橋本初子 一九九〇年『中世東寺と弘法大師信仰』京都、思文閣出版
- 広瀬良弘 一九八三年『曹洞禅僧における神人化度〜悪霊鎮圧〜』印度学仏教学研究所紀要、三一巻二二号、二三三〜二三六頁
- 一九九七年『曹洞宗の展開と地域社会(四)〜禅僧の神人化度と温泉〜』跳龍第五六二二号、二五〜三一頁
- 細川涼一 一九八七年『中世の律宗寺院と民衆』東京、吉川弘文館
- 伊藤克己 一九九二年『中世の温泉と『温泉寺』を巡って』歴史学研究第六三九号、二〜一〇頁
- 一九九九年『温泉の歴史〜中世の温泉〜』歴史と地理第五二七号、三七〜四六頁
- 國原美佐子 一九九八年『十五世紀の醍醐寺における洗浴について』東京女子大学紀要、論集第四十八巻、一〜三八頁
- 松尾剛次 一九九六年『救済の思想〜叡尊教団と鎌倉新仏教〜』東京、角川書店
- 松尾恒一 一九九三年『中世寺院の浴室〜饗応・語り・芸能〜』二遍聖絵と中世の光景』一遍研究会編、東京、ありな書房、七一〜九四頁
- 宮下秀彦 一九九八年『東北地方における中世曹洞教団の展開の一断面〜福島県殺生石説話を中心として〜』愛知学院大学文献会紀要第九号、七五〜八三頁
- 村山光一 一九九四年『古代・中世に沐浴・風呂』杏林大学外国語学部紀要第六号、六〇〜六七頁

- 中村修也 一九九五年「京の風呂屋覚書」 文科大学教育学部紀要第二十九号、二二〇〇年  
二二〇〇年『薬師信仰と護国の仏から温泉の仏へ』東京、岩田書院  
二二〇〇年『湯屋の皇后と中世の性と聖なるもの』(名古屋、名古屋大学出版会) 一七〇～一七四頁参照
- 西尾正仁 二〇〇〇年『湯屋の皇后と中世の性と聖なるもの』(名古屋、名古屋大学出版会) 一七〇～一七四頁参照
- 埼玉県立博物館編 二〇〇〇年『湯屋の皇后と中世の性と聖なるもの』(名古屋、名古屋大学出版会) 一七〇～一七四頁参照
- Schafer, Edward H. 一九五六年『The Development of Bathing Customs in Ancient and Medieval China and the History of the Floriate Clear Palace』『Journal of the American Oriental Society』第七十六号、五七～八二頁
- 首藤善樹 一九八一年「中世東寺の湯結場について」『日本の社会と宗教』千葉乗隆博士還暦記念会編 京都、同朋舎、二七四～三一八頁
- Soymie, Michel 一九六一年『Sources et sources en Chine』Bulletin de la Maison Franco-Japonaise 第七卷一号、一～五六頁
- 寺林峻 一九九八年『救済の人々小説・忍性』東京、東京経済新報社
- 横井教章 一九九九年「殺生石伝説考と宗教人類学の方法と視座から」駒澤大学仏教学部論集第三十巻、二九一～三〇九頁
- 二〇〇〇年「源翁和尚の伝説と温泉」『禅の風』第二十一巻、六八～七一頁
- 二〇〇一年「日本仏教と湯の文化」『宗教研究』第七十四巻四号、三六〇～三六一頁
- 米山孝子 二〇〇〇年「行基説話と縁起絵巻」山田昭編『中世文学の展開と仏教』東京、おうふう 三二一～三二九頁
- (1) Edward Schafer 一九五六年『The Development of Bathing Customs in Ancient and Medieval China and the History of the Floriate Clear Palace』『Journal of the American Oriental Society』第七十六号、五七～八二頁
- (2) 最も初期の寺湯についての記録は東大寺、興福寺、唐招提寺、東寺、大安寺、法隆寺で発見されている。橋本初子著一九九〇年『中世東寺と弘法大師信仰』(京都、思文閣出版) 二〇七～二〇八頁参照
- (3) 上記橋本初子著作参照
- (4) 光明皇后の伝説の詳しい例と寺での施浴の伝説、絵巻、奇跡的物語集については阿部泰郎著一九九八年『湯屋の皇后と中世の性と聖なるもの』(名古屋、名古屋大学出版会) 一七〇～一七四頁参照
- (5) 寺への経済効果を含める東寺と湯の管理の大方の部分については上記橋本初子著作と、首藤善樹著一九八一年「中世東寺のゆけちば湯結場について」『日本の社会と宗教』千葉乗隆博士還暦記念会編(京都、同朋舎) 二七四～三一八頁参照
- (6) 醍醐寺に関して國原美佐子氏に多くの資料をいただいた。國原美佐子著一九九八年「十五世紀の醍醐寺における洗浴について」(東京女子大学紀要、論集第四十八巻) 一～三八頁参照
- (7) 古代、中世の日本の入浴の歴史の移り変わりについては阿部泰郎著一九九八年『湯屋の皇后と中世の性と聖なるもの』(名古屋、名古屋大学出版会) 一七〇～一七四頁、松尾恒一著一九九三年「中世寺院の浴室と饗応・語り・芸能」、『一遍聖絵と中世の光景』(一遍研究会編、東京、ありな書房) 七一～九四頁、村山光一著一九九四年「古代・中世に沐浴・風呂」杏林大学外国語学部紀要第六号、六〇～六七頁、中村修也著一九九五年「京の風呂屋覚書」文科大学教育学部紀要第二十九号、二二〇～二二四頁、埼玉県立博物館編 二〇〇〇年『湯屋の皇后と中世の性と聖なるもの』(名古屋、名古屋大学出版会) 一七〇～一七四頁参照
- (8) 『湯屋の皇后と中世の性と聖なるもの』(名古屋、名古屋大学出版会) 一七〇～一七四頁参照
- (9) 眞言律僧侶と彼らの社会福祉活動については、細川涼一著一九八七年『中世の律宗寺院と民衆』(東京、吉川弘文館)、松尾剛次著一九九六年『救済の思想と叡尊教団と鎌倉新仏教』(東京、角川書店) 参照
- (10) 寺林峻著一九九八年『救済の人々小説・忍性』(東京、東京経済新報社) 九九～一〇〇頁参照
- (11) 温泉神社・寺院と薬師については西尾正仁著二〇〇〇年『薬師信仰と護国の仏から温泉の仏へ』(東京、御影史学研究会民俗学叢書、岩田書院) 参照

- (12) 「温泉発見伝」や僧侶についてのあらまはは、西尾正仁著二〇〇〇年『葉師信仰と護国の仏から温泉の仏へ』(東京、御影史学研究会民俗学叢書、岩田書院) 参照
- (13) Michel Soyminé著一九六一年「Sources et sources en Chine」Bulletin de la Maison Franco-Japonaise第七卷一号、一〜五六頁参照
- (14) 熱塩温泉の歴史については熱塩加納村史編纂委員会編一九八二年「熱塩加納村史」第一卷(熱塩、熱塩加納村) 参照
- (15) 殺生石の伝説については宮下秀彦著一九九八年「東北地方における中世曹洞教団の展開の一断面」福島県殺生石説話を中心として」愛知学院大学文献会紀要第九号、七五〜八三頁、横井教章著一九九九年「殺生石伝説考」宗教人類学の方法と視座から」駒澤大学仏教学部論集第三十卷、二九一〜三〇六頁参照
- (16) 神人化度における広義的テーマ、もしくは神が禅の道に入ることによりお返しに守護することについては広瀬良弘著一九八三年「曹洞禅僧における神人化度」悪霊鎮圧」印度学仏教学研究紀要、三二卷二号、一三三〜一三六頁、同著一九八八年「禅宗地方展開史の研究」(東京、吉川構文館)、四一五〜四二一頁、「禅とその歴史」石川力山・広瀬良弘編一九九九年(東京、ぺりかん社) 二七五〜二八四頁参照
- (17) 源翁が建立した寺院や発見した温泉のほかの例については長谷川俊峰著一九九七年『源翁禅師と常在院』(表郷村、常在院) 参照
- (18) 温泉、そして慈眼寺と大寧寺における曹洞宗拡大については広瀬良弘著一九九七年「曹洞宗の展開と地域社会(四)」禅僧の神人化度と温泉」跳龍ちゅうりゅう第五六二号、二五〜三一頁、横井教章著二〇〇〇年「源翁和尚の伝説と温泉」禅の風第二十一卷、六八〜七一頁参照
- (19) 温泉寺の現象については伊藤克己著一九九二年「中世の温泉と『温泉寺』を巡って」歴史学研究第六三九号、二〜一〇頁、同著一九九九年「温泉の歴

史と中世の温泉」

歴史と地理第五二七号、三七〜四六頁参照